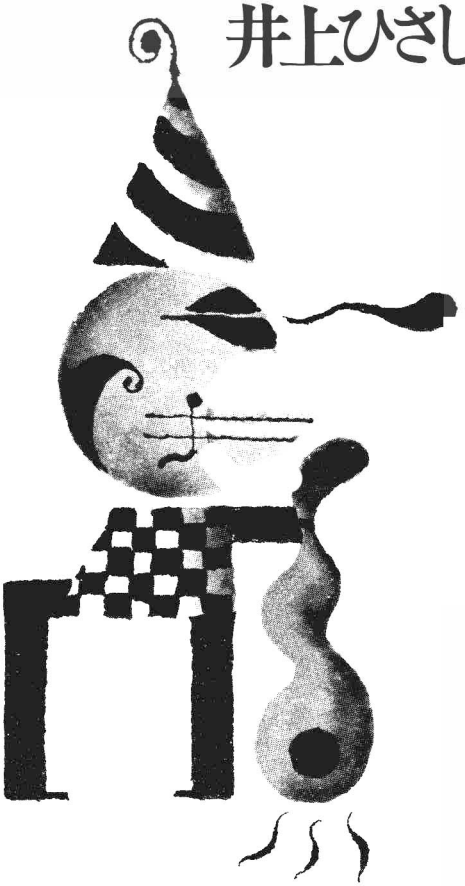
他人の血

井上ひさし

他人の血

井上ひさし



講談社

他人の血　七九〇円

第1刷発行　昭和54年11月30日

著　者　井上ひさし
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2—12—21
電話　東京(03)945—1111(大代表)
振替　東京8—3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©1979 HISASHI INOUE Printed in Japan

0093-306263-2253 (0)　(文2)

目次

他人の足　5
他人の指　29
他人の臍　43
他人の核　67
他人の穴　93
他人の眼　105
他人の口　125
他人の目　151
他人の皮　173
他人の血　201

装幀　阿部隆夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

他人の血

他人の足

1

平の銀行員から次長や支店長などの役席を経て本店へ部長として引き揚げられ重役を目指すには、つまりエリートバンクマンになるには、血筋のいいこと、一流大学を出ていること、閨閥を持っていること、上司に愛され同僚に信頼される人柄であること、頭の回転の早いこと、管理能力があること、運の強いことなどなど、いくつもの資格に恵まれていなければならないといわれるが、その男は右に列挙した資格をすべて欠いていた。

まず血筋血統だが、はっきりしているのは父方の祖父が新潟県の水呑百姓の五男で祖母が福島浜通りの小漁村の漁師の末娘だったということまでで、それ以前のことは皆目見当がつかない。その祖父母にしても、東京下町の風呂屋で三助と飯炊きをしていたぐらいしかわからない。祖母は父を懐妊したことを最後の最後まで隠し通していたらしく、父が呱々の声をあげたのは風呂屋の賄所の板の間の上だった。父は尋常小学校を卒える前から同じ町内のそば屋へ出前持として奉公に入った。

一方、この男の母方の祖父母はともに山形県のある寒村の出である。祖父が下町の、前出の風呂

屋とはさほど遠からぬ魚屋の小僧になり、あるとき、近くの袋物問屋へ刺身を届けに行くと、出てきた女中が、

「魚芳さあ、貴方ん所の出前、えづも遅えなあ。魚あ、途中で腐っちまうべし」

と山形県の小国弁で文句を言い立てた。祖父も小国の出身だったので、おやと思って見ると、勝手口から、縮れ毛の、額のぐんと前に迫り出した、目と目との間がばかに離れた、唇の部厚くて大きな、獅子ッ鼻の少女が顔を――もしこれが顔と言うことが出来ればであるが――覗かせていた。同じ村の人間を故郷を遠く離れた東京の空の下で見た嬉しさ懐しさに祖父は思わず、

「あいやあ、お前、新田の小関家のトメでねえべが」

盤台を放り出して勝手口へ走り寄ったが、この獅子ッ鼻の少女こそほかでもない、この男の母方の祖母になるべく宿命づけられた女だった。やがて祖父は魚芳から独立して魚の棒手振、行商をはじめるが、独立を機に鳥越神社の裏の長屋へ祖母を迎えて世帯を持った。もっとも二人が仕合わせだったのはここまでで、祖父は間もなく両国駅近くの路上で焼け死んでしまい、祖母は寡婦となった。一目見たら三日三晩は魘されるという顔の持主であるから、再婚話なぞあるわけもなく、祖母は生れたばかりの幼女を背負って町内のそば屋へ住み込みの女中に入った。ちなみに、この男は幼いころ、他人からよく、

「おやまあ、祖母さんに生き写しだねえ」

と言われたものである。これが決して褒め言葉ではなかったことを、この男は後年、毎日のように思い知らされるが、そのことについてはあとでまた詳しく書くことになるだろう。母方の祖父の死を「焼死」といったが、正確には「圧死」の後の「焼死」だった。関東大震災の最初のひと揺れ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

が襲って来たとき、祖父は両国のはいんぬき稲荷のあたりの長屋で魚を売っていた。ぐらぐらっと大地が揺れた途端、こいつはただごとではないとぴんと来て、祖父は盤台を大きく揺すりながら蔵前橋に向って走り出した。両国橋からまわれば死なずに済んだのに、と祖母は後で言い言いしていたが、これは無理な注文である。はんぬき稲荷から鳥越神社に出るには、蔵前橋を渡る方がはるかに近道なのだから。祖父は鳥越神社方面から蔵前橋を渡って本所被服廠跡へ避難しようとする群衆に巻き込まれ、押し倒され、踏み殺されてしまったのだが、最後まで盤台は離さなかった。あくる日の夕方、母を背負った祖母が蔵前橋の東の橋詰のところで黒焦げで転がっている祖父の屍体を探し当てたが、そのときの祖父は右手で盤台をふたつ押え込むようにし、左手には鯛の尻尾をしっかりと握りしめていたという、祖父同様、鯛は黒く焼けていた。

こうして祖母に連れられて母はそば屋の三階――この界隈には木造の三階建てが意外に多い――の三畳間に住むことになり、やがて小学校に通うようになると店を手伝うようになった。そしてそこへこの男の父が出前持の少年としてやってきたわけである。

父と母が一緒になり、向う柳原の通りに小さなそば屋を出したのは昭和十五年の春だった。このときから昭和十七年春までが、この一族のもっとも光明に溢れた時代といえるだろう。三助、飯炊き、小僧、女中として東北の各地から――父方の祖父の出身地である新潟県が東北地方に属するかどうか、これは大いに議論の分れるところだが、筆者はこの県を東北の一地方とみている。なぜなら、この県は現在も東北電力株式会社の管轄下にあるからである――東京に流れ込んだ百姓の末裔たちが、ここにようやくどうやらこうやら独立を果したのだ。がしかし、戦争がまたものごとをぐれはまにした。この男が生れてすぐ、父に赤紙が舞い込み、間もなく店は統制令に引っかかって

閉店を余儀なくされた。同じ町内にそば屋が四軒も営業するのは贅沢というものである、四軒でよく話し合い、うちの一軒は店仕舞いをなさいということになり、そこは女手ひとつの弱さ、他の三軒からよってたかって苛められ、とどのつまりは店仕舞いに追い込まれてしまったのだった。母は再び旧主人の許へ通って店を手伝うことになったが、不幸はさらにこの男の一家を連打した。父親の南方戦線での戦死を皮切りに、焼夷弾の自宅への直撃による父方の祖父母と母方の祖母の死、そして打ち止めは母のアメリカ軍の艦載機による機銃掃射による死――そのとき母は不運にも出前に出掛けていた――、こうしてこの男は、母の働いていたそば屋に出前持少年として引き取られ、昼は教科書の入った鞄をさげて学校に出掛けて行き、夕刻から午後十時の閉店までは丼の入った岡持ちを担いで自転車を漕いだ。

商業高校三年の秋、「卒業後の計画は」とそば屋の主人に問われたこの男は、「出来ればこのまま店に残りたい」と答えた。十七と十六と十四との三人の娘の父親でもあった主人はこの男の答えを聞いてひそかによろこんだ。わが子同様に気心も知れているし、やや鈍重なところはあるけれども真面目な働き者、この男に三人の娘のうちのだれかを嫁づけ、店を継いでもらおう、と主人は前まえから考えていたのである。そこである夜、主人は三人の娘を集めて、この男のことをそれぞれがどう思っているか、たずねた。すると長女はげらげら笑って自室に引き上げ、次女は怒ったように「ばかにしないで」と言ってテレビの画面に向き直り、三女は「バケモノの顔を見るだけでもいやなのに、結婚しないかだなんて、お父さんはそれでも正気なの」とあべこべに訊き直してきた。

苦虫を嚙み潰したような表情で茶の間から出て来た主人に、帳場でその日の売り上げを帳面につけていたこの男が言った。

「ぼくの綽名がバケモノだったなんていままで知らなかったなあ」
「男の値打を顔で判断するとは、おれも悪い育て方をしてしまったものだ」
「でもたしかにぼくの顔はバケモノじみているかもしれません。だからご自分やお嬢さんたちを責めないでください」
「ありがとうよ。ところで卒業したらどうする。ずっとうちで働いてくれるかい」
「いや、どこかへ就職します。そうだ、銀行からの求人案内が学校の掲示板に貼り出してあったっけ。銀行を受けてみようかな」
「でも親の居ない子は採らないんじゃないのかい」
「よくそう言いますけど、どうなのかなあ。とにかく落ちてもともとだ、一応は受けてみます」
「そうか。もし保証人が要るようなら、遠慮なくおれに言っておくれよ。よろこんで引き受けさせてもらうからな」
この男にとって幸運だったのは、面接委員のひとり――その銀行の重役だった――が、〈美男と醜女は銀行員には向かない〉という考えの持ち主だったことである。この重役によれば、美男の行員には女からの誘惑が多くその分だけ銀行の金を使い込む危険が増す、また醜女の行員は男が出来ると得てして銀行の金を貢ぎたくなるもの、なのだそうだ。他の面接委員の質問におどおどと答を返している男を眺めながら、重役は机上の採点用紙に三重丸を書き込んだのだった……。
こんなわけで、この男の血筋血統の悪さは折紙つきといってよかった。しかも高卒である。閨閥を持つどころか三十代の半ばにさしかかろうというのにまだ独身だった。親がわりのそば屋の主人がこの男の写真を――それも写真師がかなり大幅な、そして巧妙な修整をほどこした写真を――婚

期を逃しそうになって焦っている娘のところへ持ち込んでまわったが、「とにかくそれでは一度会わせてください」と言ってきた娘はひとりとしていなかった。それどころかほとんどの娘がそば屋の前を避けて通るようになったぐらいである。「あのそば屋のおやじさんてほんとうにひどいんだから。だって類人猿そっくりの、人間もどきと見合いをしてくれって頼んできたのよ。いくらオールドミスになりかかっているといったって、こっちにも誇りというものがあるわ。ほんとうにばかにしてる。もう二度とあのそば屋のそばはたべてやらないから」

いつだったか銭湯の仕舞い湯に漬かっていたら隣の女湯からこんな話し声が聞えてきた。それからそば屋の主人は例の修整ずみの見合い写真を持って歩くのをやめた。

では上司や同僚からの受けはどうだったのかといえば、これもあまり香しくはない。容貌に自信のないせいでこの男はほとんど口をきかなかった。やがてこの男のまわりには朦朧とではあるが常に憂欝な気分が立ち籠めはじめ、これが一層、上司や同僚との間に深い溝を掘った。頭の回転も悪い。その証拠にいまもってこの男は麻雀の点数をすぐには出すことができない。管理能力があるかどうかもわからなかった。入行して十五年以上たったのに身分は一介の訪問預金集めの外勤行員、部下がおらぬので管理能力の有無をたしかめる材料がないのだった。

（ないないづくしのこのおれのことだ。管理能力なぞもないだろう。定年までこのおれはこの支店の平外勤、ただただ靴の底をすり減らすために歩き回るだけさ）

この男はこう諦め今日もこつこつと得意先をまわっているのだが、たったひとつこの男にも、いかにも銀行員らしいところがあった。それは「山田一郎」という名前である。定期預金などの書式の説明のために銀行は店頭に大きなひな型を飾ることがあるが、そのひな型の預金者の名前はいつ

もなぜか「山田一郎」で、そのたびにこの男の胸の底に茶匙一杯分ほどの自信が湧く。（やはりおれも銀行とまったく関係がないわけではなかったんだ）といういじらしい自信が。

2

こんな次第だから、山田一郎がまだ女を知らないと書いても、読者の納得は得られるはずである。すでに述べたように、見合い話は写真交換の段階から先へ進んだことはないし、それぐらいだから、どこかの娘とふと目が合って恋に落ちるなどということは有り得べくもなかった。むろん山田の方は恋にでも肥溜にでもどこへでも落ちる覚悟でいるのだが、どんな娘にもこの男は動物園の檻の中の生きものぐらいにしか見ないのである。

山田一郎も木石ならぬ生身の人間、一度でいいから女の傍で一夜を過したいと脳味噌がぶつぶつ煮え立つような思いのする晩もあった。アパートの一室で——洋服箪笥に和箪笥、テレビにビデオ、ステレオに本のぎっしり詰まった書棚がふたつ、電子オーブンに冷蔵庫、そして洗濯機。花嫁がいつなんどき身ひとつでやってきても、すぐさまその日からかなり結構な文化生活が営めるようにたいていのものは揃っていた——小椋佳のレコード（同じ銀行員なのにどうして自分とこうもちがうのだろうか）などをかけて頭を冷そうとするのだがどうにもおさまらない。またこういうときにかぎって週刊誌がテレビの上から落ちて、しかも『厳選東京キャバレー・ベスト3』といった囲み記事の載る頁が、山田を嘲笑するかのようにぱっと開いてしまう。

〈ラブショック。①所在地＝上野。②夜九時の値段＝五千円。③ホステス数＝十八人。④特徴＝トップレスGOGOのおあとはボックスでの静かな指の反復練習を……〉

〈スィートサロン・ハレム。①渋谷。②六千円。③十二人。④小型サロンにふさわしく、彼女はベビードール姿で「カワユイ」〉
〈メキシコ。①下北沢。②八千円。③十人。④真紅の長襦袢に白い伊達巻をしめて。でも中身は現代的、かつ挑戦的です〉
とたんに山田の脳味噌は「指の反復練習」「カワユイ」「真紅の長襦袢」などの文字で、上から下へ下から上へ掻きまわされてしまい、矢も楯もたまらず、山田は有金をひっ掴み外へ飛び出して行く。しかし、キャバレーでもトルコでも彼はまず入口で待ったを喰らった。
「ほかのお客さんの迷惑になります。どうかご遠慮ください」
どうして自分の顔が他の客の迷惑になるのか、山田にはわからない。が、こうはっきり言われると、
「かもしれませんね。では……」
と引き返さざるを得なかった。運よく入口の検問を突破しても、
「あの人、人間なの」
と女たちが寄りつかない。またよくよく運に恵まれて傍へ女がやってくることがあっても、女はきまって表情を硬ばらせてこう言うのだった。
「あたいに触ったりして、あたいの身体をこわしたりしちゃいやよ」
どうやら女たちには山田がキングコングの縁者かなんかのように見えるらしかった。
五月のある月曜の午前、山田は久しぶりにバスに乗った。山田は小型車を持っている。外勤行員に車は必需品なのである。だが、その朝、子どもの悪戯か、アパートの裏の畑に停めておいた彼の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook